

タイトル：【活動レポート】悪地協力USRの会：日本で得た知見

作者：

林玲安（国立成功大学「悪地協作USR」／プロジェクトマネージャー）

10910009@gs.ncku.edu.tw

本文：



[【惡地小聚】旅行的意義－從日本發現惡地心生活A3.png](#)

写真説明：本イベントのポスターは飛行機をモチーフとしており、わたしたちの日本見学を象徴している。

日本へ「心に適う生活」を探しに行く背景

「悪地協作」は、国立成功大学の教職員、地域コミュニティ、関連団体などによって構成される産官学研の分野横断チームである。プロジェクト担当者兼都市計画学科助教授の張秀慈のもと、12名の成大教員と4名のプロジェクトスタッフが実行チームを成立した。

本チームは台湾南西部における泥岩悪地<泥岩が侵食されてできたバッドランズ>をフィールドとして、大学と地域組織との力および各関係者の資源も統合しながら、協働の精神に基づいてバッドランズにおける共創的發展を深化させることを目的としている。さらに、フィールド運営と大学の社会実践をつなぐ相互作用モデルを構築し、バッドランズに対する固定観念を転換しようとしている。目標としては、バッドランズにある山村を地域生産・生態系の持続可能性・「心に適う生活（嚮心生活）」を学ぶ学習型地域へと発展させ、さらに地域連携および山麓地域の持続可能な発展の実践拠点とすることである。

台湾南西部の山麓地域に位置するバッドランズは、まるで月の表面のような泥岩悪地地形という特殊な景観を有し、多様な民族と信仰文化が共存する地域でもある。しかし、その特別な地理条件や法規制により開発が制限され、働き口の不足、人口流出、高齢化といった課題を抱えている。こうした限界集落や地方創生の課題に直面する中、泥岩悪地の関係者たちは、2025年に日本各地を訪れて見学した。悪地協作USRチームは2025年12月23日、左鎮の「常在空間」において、「旅の意味：日本で見た心に適う生活」という会を開催し、その関係者たちに日本における見学に関して発表してもらった。5名の関係者は日本の東京・青森・九州・瀬戸内などを訪問したため、空間活用・日常防災・地域共生・観光振興・六次産業化、国際芸術祭などについて、現地体験や多角的な視点を通して紹介した。また、当日は20名以上の参加者が集まり、発表者たちと交流し、双方も今後悪地の発展に向けた新たな可能性や解決策について意見を交わしていた。



[DSC05051.JPG](#)

写真説明：本イベントには左鎮の地域パートナーに加え、都会中心部から初めて悪地を訪れた参加者も多く見られた。

1. 都市・地方関係の再生：国際デザイン大賞を参加し、そこで見た日本の廃校再生ストーリー (発表者：曾思茜／成大悪地協作USR計画 プロジェクトプランナー)

曾思茜は、悪地協作USRチームが2025年に「日本の「2025 Good Design Award」デザイン賞」に応募し、Re: E-E-E 都市・農村関係協働方法論」という作品が入選して日本で展示された経緯を紹介した。これを機に、ワークショップやイベントデザインを活用して人々が地域課題に関心を持つきっかけをどのように生み出すか、また農村部の遊休スペースをどのように活性化するかについて検討した。さらに、都市と地方の多様な人口が世代を超えて参加し、対話とエンパワーメントを通じてクリエイティビティを発揮することで、新たな協働の機会や可能性が生まれることの重要性が示された。

こうした都市と農村間の人の交流を促進する考え方は、日本・千葉県の「保田小学校」の事例に体现されている。曾は、少子化と人口流出によって廃校となったこの学校が、現在では宿泊・飲食・物販・交流機能を備えた道の駅として再生されていることを紹介した。教室は宿泊スペースへと改装され、黒板・机・椅子などが要素として保存されており、温かみと可愛らしさを感じさせる。

また、体育館は農産物や土産品を販売する「里山市場」として活用され、観光客や住民が新鮮な食材や学校をモチーフにしたオリジナルグッズを購入できる場となっている。廃校した学校は、以上のように学校の面影を活かし地域ブランドへと転換したことで、スペースの活性化だけでなく観光振興にも寄与している。



[DSC09276.JPG](#)

写真説明：「保田小学校」では、教室を宿泊空間へと改装し、黒板・机・椅子などが要素として保存されている。

2. 防災は日常そのもの：デザインによる共生的な公共参加の推進（発表者：林玲安／成大悪地協作USR計画 プロジェクトマネージャー）

近年、防災意識の高まりを背景に、林玲安は、チームが東京・21_21 DESIGN SIGHTでの企画展「そのとき、どうする？」を観て得た学びと気づきを共有した。彼女は、現在の悪地協作USR計画においても、自然災害や事故に直面した際のレジリエンス（強靱性）およびリスクへの備えをいかに高めるかが重要な課題となっていると述べ、その上で、この企画展では日本がどのように、面白い体験・画像・アニメーションを用いて、複雑な災害データを分かりやすく解説し、住民に災害と当地との関係性を理解させようとしていることを紹介した。さらに、家具や日用品のデザインにも防災のコンセプトが取り入れられており、例えばガラスを踏んでも安全な室内用スリッパ・アイスボツ

クスとしても使えるサイドテーブル・緊急時に救命ホイッスルとして機能するマグネットなど、防災意識が生活の中に自然に組み込まれている製品を紹介した。これらの製品は本計画における今後の防災準備の参考になるものであると述べた。

一方で林玲安は、チームが東京・墨田区の「百樹園」を訪問した経験についても紹介した。これは千葉大学と地域コミュニティが共に行ったデザインと実践の事例であり、住民が「カラーシール」による投票で公共スペースである公園各エリアの使い方を決める仕組みでもある。大学と地域の協働により、公共スペースは単なる無機質なインフラではなく、住民の思いを体現して地域のニーズに寄り添う場になり、さらにみんなで守る「里」へと変化を遂げている。



[IMG_3082.JPG](#)

写真説明：企画展では、来場者がゲームを通じて楽しく防災知識を学ぶコーナーが見える。

3. 再生する青森：持続可能な観光と産業の支援システム（発表者：林筱棋／成大悪地協作USR計画 プロジェクトデザイナー）

林筱棋は台湾政府の「青年百億海外夢実現基金」プログラム第一回に採択され、青森で地域創生およびコミュニティ機関のインターンシップに参加した。悪地協作のプロジェクトデザイナーの

彼女は、インターンシップを通じて学んだことを共有し、それを台湾や悪地へどのように反映できるかについても述べた。

彼女は青森駅で見た三内丸山遺跡を物語る展示が駅から重要な歴史遺跡へと観光客を自然に誘導する仕組みであると述べた。また、地域の重要祭りにある黒石ねぶた灯籠は、廃材を再利用するDIY体験を通して文化を再現する象徴であるとして、青森の文化資産を五感で体験できる形へと転換している点が特徴的であったと話した。

さらに、奥入瀬溪流ではエコツーリズム型のガイドツアーが展開されており、教育・体験・経済価値を兼ね備えた持続可能な観光モデルになっていることを紹介した。また、りんご研究所などの機関は、研究開発をもって行政と産業をつなぎ、複雑な研究成果や歴史資料を分かりやすいインフォグラフィックや展示へと転換することで、行政・研究者・生産者の連携を円滑にするとともに、りんご産業の国際競争力向上にも大きく貢献している。このような包括的な産業支援システムは、自然環境・歴史と人文・農業発展を観光価値へと転換し、青森独自の地方創生の道を切り開いている。林はこのような事例は、同様の課題を抱える台湾の農村地域にとっても見本になり得ると言った。どのようにして、各主体の強みをどのように結び付きリスクや課題に対してより強靱な地域を形成するか、これが地域の持続可能な発展の道であることを示してくれるからである。



連結 [IMG_1284.JPEG](#)

写真説明：展示で見た三内丸山遺跡の模型は、縄文時代の暮らしと現在の考古遺跡の様子を同時に並べており、過去と現在の対照を面白く示している。

4. 職人精神に基づくマーケティング学：九州農産の六次産業化から得た学び（発表者：頼政達／左達商號 代表）

台南・左鎮出身の地域プレーヤー・頼政達は、台湾農業部主催の産業見学プログラムに参加し九州を訪れた。彼はFORTHEESによる地域ブランドの販売・展示スペースへ行き、茶づくり・宿泊施設・茶工場見学などを含む「海外向けの見学型マーケティング」に基づく地方創生モデルについて学んだ。また、嬉野では、温泉・茶・肥前吉田焼それぞれ独立していた三つの産業を結び付け、独自の地域観光ブランドへと発展させている事例について見学した。さらに、職人精神に基づいて製塩や風土料理を推進し、「伊都菜彩」農産物直売所が生産者への敬意を可視化することで、消費者を引きつける仕組みにも注目した。また、福岡県うきは市の六次産業化支援センターおよび地域おこし協力隊は制度を整備して生産ラインを共有し、都市部の人々の地域参画を促進する仕組みである。頼は以上の見学をふまえて、行政・住民の連携と産業価値向上のモデルを台

湾が学ぶべきであると述べた。左鎮の現状を考えると、竹細工などの地域工芸・クズウコンやゲットウの産業・複合型スペースの運営・関係人口の形成などが徐々に軌道に乗りつつある。頼は今後、新たに成立した「台湾・大左鎮共同発展協会」が分散型ネットワークとして機能し、国際の地方創生界限において台湾独自のレジリエンスを示すことを期待している。



[DSC_3371.JPG](#)

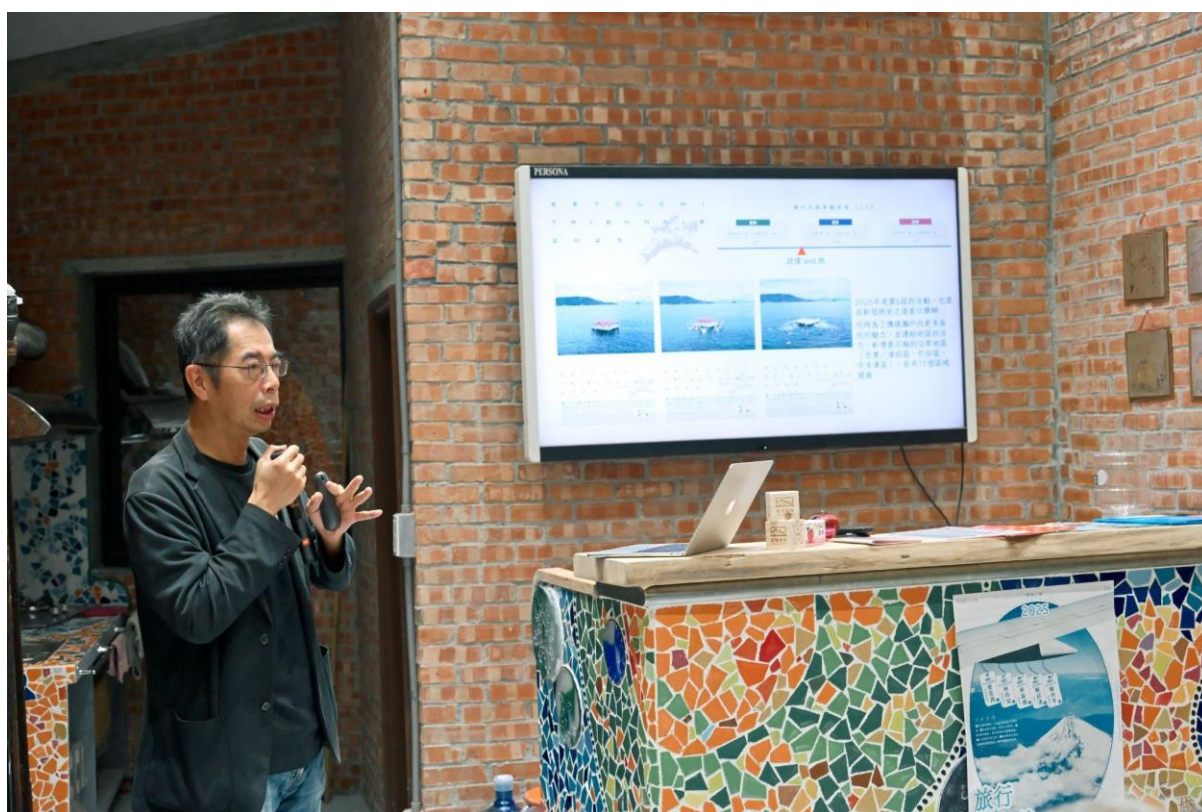
写真説明：頼政達は九州における産業見学を経て、左鎮の今後について検討している。

5. アートを道しるべに：瀬戸内海と地方共生（発表者：楊中平／成大情報工学科教授・悪地協作USR計画 共同担当者）

地域の展示企画やまち歩きガイドに関する経験が豊富な楊中平教授は、3年に一度の「瀬戸内国際芸術祭」への参加について紹介した。この世界的に有名な芸術祭は、頻度が3年に1度になっており、会期が3シーズンに分かれています。そこで、オーバーツーリズムによる住民の生活への負荷を避けている。しかも、多様な芸術作品が島々に点在させており、訪問者がそれを道標として自然環境や農村の遊休スペースを利用する役割を果たしている。また、「こえび隊」という国際ボランティアの存在が、人口減少に直面する島々に新たな活力をもたらしている。これにより単なる観光客の流入にとどまらず、住民が受動的な立場から能動的な参加者へと変化しつつあり、アート

の力が地域と国際社会をつなぐ媒介として機能している。こうした取り組みは、島々の再生に寄与する大きな力となっている。

楊教授は芸術祭に関連する参考書籍についても紹介した。例えば『直島誕生』は、地中美術館の元館長兼芸術評論家の秋元雄史の著作であり、株式会社ベネッセでの勤務経験や直島における美術館設立・企画に関する経緯が述べられている。また『直島から瀬戸内国際芸術祭へ：美術が地域を変えた』は、瀬戸内芸術祭の主要スポンサーである福武総一郎および総合ディレクター北川フラムによって執筆され、ベネッセアートサイト直島から瀬戸内国際芸術祭に至る準備過程だけでなく、アーティストと住民の協働を促し持続可能な運営理念を掲げたこともまとめられている。瀬戸内国際芸術祭の発展をより深く理解する上で、これらの書籍は重要な参考文献となると指摘した。



[DSC_3394.JPG](#)

写真説明：楊中平教授は瀬戸内国際芸術祭での見聞を共有するとともに、同芸術祭の関連書籍についても紹介した。

旅の意味——「心に適う生活」を探し、自分の内面に向き合う

交流会の最後に、「旅とは何か」という問いが参加者から発表者たちに投げかけられた。これに対し、5名の講演者はそれぞれの経験や感想から多様な答えを出した。デザインに携わっている林篠

棋は、インスピレーションが不足するときに特に旅に出たくなると述べた。デザインの仕事には新しい知識や文化的刺激が不可欠なため、異なる暮らし方を体験・観察すること自体が学びにつながると言った。撮影が好きな曾思茜は、旅とは自分が好きなシーンを保存し、自分の知らない世界を知る機会であると述べた。今回自費で海外見学に参加した頼政達は、旅の意味を「左鎮を離れること」として、外の世界を見て得た良いアイデアを故郷へ持ち帰り、地域に新たな可能性を生み出すことにあると言った。よく一人旅をする林玲安は、旅の道中で意識を自分自身に戻らし、異なる環境にいる自分に向き合い、自分をより深く理解するプロセスであると述べた。大学教員の楊中平は、日常観察の視点から「すべての時間が旅である」と語り、キャンパスにおける建築の光と影や動植物の変化の観察、あるいは観光や買い物を選ばずに散歩・食事・睡眠に集中することも、巡礼路のような旅になり得ると言い表した。

また、ある参加者からは、「日本では、地域で活動を続けるための精神や使命とは」という問いが投げかけられた。これに対し、発表者たちは、日本では日常防災・農業・芸術祭などの分野において観察できるのは、「小さなことを大きくし、そして長く続ける」という根性であり、こうした根性(台湾人曰く職人精神)は日本の暮らしに深く根付いていると指摘した。文化・社会背景は異なるものの、台湾が学ぶべきかつ重要な点であると結論づけた。今回の悪地協力USRの会で生み出した学びは、いずれも貴重で唯一無二の価値を持つものである。悪地協作USRチームは、今後もこのような会を継続的に開催することで、多様な視点と経験を地域の方々と共有し、悪地の関係者である仲間や関係人口を団結させ、より深い交流を生み出していくことを期待している。



[DSC_3418.JPG](#)

写真説明：参加者と発表者の間での質疑応答やフィードバックが行われ、深い交流と議論が交わされた。